

2年1組

## 出会いたい いのち ～アヒルと、たまごと、わたしと～



### 「楽しみにしていた いのち」

カエル、オタマジャクシ、ザリガニ、カタツムリ、ドジョウ、アメンボ、魚、カブトエビ。自然体験園やお散歩の中で捕まえた生き物が教室に増えてきました。この生き物のひとつに、「卵」がありました。何の卵かは分かりません。お散歩の帰りに見つけた卵。周りに鳥の巣がないか探しても見当たらず、教室に持ち帰ってきた子どもたち。第一発見者のSさんの段ボールロッカーで、ビニール袋の中に卵の巣を作り、休み時間のたびに様子を見ていました。

月曜日。5時間目の生き物の時間が終わっても戻ってこないTさんとKさん。帰りの会が終わった頃、ようやく2人が帰ってきました。その手には、割れた卵。何があったんだ、と騒がしくなる教室。事情を聞きたい子どもたちの気持ちも分かったのですが、下校時刻となっていたため次の日の朝、話をすることを約束して帰りました。

みんなが帰った後、SさんTさんKさんと話をしたことは、卵の巣としていた葉っぱが枯れてきていたこと。巣を新しくするため、木の枝や葉っぱを変えようと袋ごと卵を外に持ち出したこと。袋の底に木の枝を敷くために卵を取り出して手に持っていたこと。卵を持ったまま木を折ろうとしたら手を滑らせて卵が落ちたこと。みんなに正直に話すため教室に戻ろうとしたこと。代わりに卵が落ちていないか下校ぎりぎりまで探し回っていたこと。涙ながらに話してくれたTさんとKさん。2人の「ごめんね」という言葉と想いをしっかりと受け止めていたSさん。

次の日の朝、TさんとKさんがみんなに話をしてくれました。「落として、悲しかった」と言うTさん。するとNさんが「大切にしていたから」と呟きます。「俺はニワトリ生まれるかもって楽しみにしていたから、落ちて、割れちゃったって、、、」とKさん。「俺も、どんな子が生まれてくるかなって楽しみにしていた」とSさん。真剣に話を聞き、「Tくんは、わざとじゃないから」「いろんなとこ探してきてくれたんだ」と、語る子どもたち。その時間、卵を割ってしまったKさんとTさんのことを責める言葉はひとつもありませんでした。

子どもたちは、卵を「生き物」として大切に見守っていました。どんな子が生まれてくるのかと命の誕生を楽しみにしていました。生まれたら一緒に生活できるんじゃないかと期待していました。そんな子どもたちの気持ちを受け取り、この子たちと生き物を見つめていけたらいいな。生まれてくるか不確かな生き物でなく、みんながその生き物に関わっていけるような確かな命を迎えられたらいいなと感じました。これから、子どもたちと一緒に考えていきたいと思います。

### 「迎えたい いのち」

「生き物はやく飼おうよ」「何がいいかな～」 6月、2年1組に生き物を迎えるかどうかについて話し合いをしてからというもの、早く動き出したい気持ちが高まっていました。この子たちとどんな生き物を迎えようか、この子たちだからと思える生き物は何か考えていました。そして、7月下旬、子どもたちに私の想いを届けさせていただきました。



大池でたくさん遊んだこと。学級園に池を作り、泥だらけになって遊び続けたこと。拾った卵を大切にしていたこと。その卵が割れ、生まれてくる命と出会いたかった、楽しみにしていた気持ちを再確認させられたこと。鳩が卵から巣立つまで、名前も付けて大事に見守り続けたこと。そんな2年1組のみんなとアヒルを迎えるのはどうかな？と子どもたちに提案し、動物園で撮影してきたアヒルの映像を見ました。前のめりになって画面を見つめ、「かわいい！」「だっこしたい！」「飼いたーい！」とアヒルの可愛さに惹きつけられていました。「アヒルは先生からの提案だけど、本当にみんなアヒルでいいの？」と聞くと、「アヒルは僕たちと共通点がいっぱい！」とSさん。「もう俺はアヒルじゃないと嫌だ」とDさん。手を高く挙げる子どもたち。そんな中、Mさんが「私も飼いたいんだけどさ、でもさ、急に来るとちょっと怖い。基地もまだないしさ、池も汚い。」と、みんなに気持ちを届けてくれました。「そうだよ準備が必要だよ！」「今の池じゃアヒルはダメだよ」「アヒルの家ってどんなの？」「しかもさ、アヒル何食べるのかな？」「オスとメスってどうやって見分けるの？」「先生、早く外行ってきれいな池作りたんだけど！」「ビニールシートとか敷いてさ！」「タブレットで調べてもいい？」と、次々にやりたいこと、知りたいことが溢れてきました。みんなの表情が変わり、教室



の中の温度が一気に上がったような、エネルギーで満たされていくような気がしました。学級園に飛び出し、「まずは平らにしよう」と学校中から土を集めてくるDさんたち。バケツで水を抜き続けるRさん。鍬で土をならしていくTさんやRさん。本やタブレットでアヒルを調べ、メモを取るAさんたち。振り返りでは「池づくりさ、みんなにもっと手伝ってもらわなきゃだめだ！」「アヒルは食べたらダメな野菜があるんだよ。」「しっぽでオス



メス見分けるの知らなかった！どっちが来るかな？」「小屋を頑丈にきれいに作って、調べたこと全部入れて、すごい小屋を作りたい！」「もっとアヒルが飼いたくなかった」「みんなで協力しないと。協力して飼いたいなって思った」と、さらにやる気で満ちていました。

正直なところ、本当にアヒルでいいのか、本当に飼えるだろうか、と不安でいっぱいだった私。しかし、子どもたちの飼いたい、知りたいというエネルギーやワクワク感に背中を押され、一緒に調べたり池を片付けたりしているうちに、私も不安より楽しみの方が大きくなっていました。アヒルを迎えたい。もっとアヒルのことを知りたい。という思いは自ら行動していくエネルギーになり、周りの人をも巻き込んでいく力をもっているのだと思いました。そんなエネルギーを持った子どもたちと、アヒルと向き合っていきたい。一緒に学んでいきたいと改めて思いました。

生き物を迎えるかどうかの話し合いで、「生き物を飼ってさ、何の意味があるの？」とみんなに問い続けていたNさん。今はまだ答えられないけれど、2年1組のみんなとアヒルとの暮らしを終える時、この問いにみんなは何と答えるだろうか。私は何と答えられるだろうか。Nさんの問いが私の問いにもなっています。

